

法藏における一心の性格について

鍵 主 良 敬

佛教教理史展開の上で心の問題のしめる位置はかなり重要であつたと思われるが、今、萬有の根本原理としての絶體無二の心性とか、唯一の根本識とか解される場合の一心についてみると、それが中國佛教においてはじめて本格的注意を喚起するのは十地經論の「三界虛妄但是一心作」の文である。勿論心性論一般についてみれば維摩經佛國品にみられる唯心の淨土をはじめとして舊譯華嚴經には如來林菩薩の唯心偈があり、その他にも龍樹は大智度論卷二十九（大正25・276b）において「三界所有皆心所作、何以故、隨心所念悉皆得見、以心見佛以心作佛」として唯心思想の一端を述べている。その心は當然空觀を背景として成り立っているのであるから、常住的な實體性の否定を意味し、究極的には心そのものを否定する立場に立つものであるが、その系譜において後に天台智顗が法華玄義卷二（大正33・693b）に「或明一法攝一切法、謂心是三界無別法、唯是一心作」と述べるごとく心の問題が教界に與えた影響は非常に大きいのである。従つて十地

經論に說かれる一心が後に心を主題として一學派を形成したのは、新しく紹介された世親教學への關心と、阿梨耶識という新概念に對して、その意味内容解明への意欲をよびおしたからに違ひないが、その心の性格を定めるについては、論自身に明確な定義づけがなされていたのではないから、その決定に對する參考となつたのが、當時きびすを接して翻譯された諸經論であつたといふことができる。即ち入楞伽經卷一（大正16・519a）の「寂滅者名爲一心、一心者名爲如來藏」や大乘起信論（大正32・576a）の「唯是一心故名眞如」にみられる一心であり、それは直ちに眞如又は如來藏心のことであつて、あらゆる存在の根元的原理を指していると解される。このような内容を持つて色々な問題を提起する一心を、賢首大師法藏はいかに理解しているか。即ち心性論の一側面を華嚴學派の立場から述べてみたいと思ふのである。さて、法藏の心に對する理解の最も體系的な敘述は、探玄記卷十三（大正35・360c）にみられる十重唯識の説であらう。

そこでは周知のごとく十地品の「三界虚妄但是心作」の文に對し、諸論が同じくこの句を引用して唯識の證成にしているが、それら諸論の述べんとする心とはいかなる意味であるか、心の作という唯識の立場がどのように述べられているかを検討すれば多門ありとして十種の唯識が挙げられている。即ち五教判という大乘始教の立場に立つ唯識では、見分と相分との別はあっても、いずれも心の變化にすぎないのであるから主觀も客觀も心内のものになる（一）相見俱存唯識。從つて客觀は主觀のはたらきに應じて現われた影であり、主觀としての心・心所に攝入するものである（二）攝相歸性唯識。又その心と心所の關係をみれば、心所は心王によつて起こされるもので、獨立した自體があるのではないからすべてが心王に歸せられる（三）攝數歸王唯識と解されている。この考え方を五教章卷二（大正45・50a）における始教の説明によつてみれば「若依始教、於阿賴耶識、但得一分生滅之義、以於眞理、未能融通、但說凝然不作諸法、故就緣起生滅事中建立賴耶」となる。ここでは深玄記において主と客、心王と心所に分析し、主體をどこに求むべきかを追求した心識論は、本識としての阿賴耶識に焦點がしぼられ、その性格を規定することによつて始教の定義づけが明確に示されるのである。即ち虚妄分別の所依として生滅の當體である阿賴耶識は、眞如と融通するものではないために、それ自身生死流轉の契機

として業等の種子によつて轉變し、異熟報の識として諸法の所依となるといわれるのである。從つて攝大乘論卷中（大正31・138b）に說かれる唯心も、唯識二十論（大正31・74b）に引用される三界唯心の心も、ともに心において一切諸法をみる唯識をいうのであるが、その場合の心識は生滅の體としての阿賴耶識であつて、直接眞實性に關係はないのである。

これに對し十重唯識の中でも大乘終教においては、心王のうちでも前七識は本識としての第八阿賴耶識を離れて別に本體があるのではないから、すべては本識に歸せられるのである（四）以末歸本唯識、又、八識といつてもその相は眞如が隨緣してあらわれたものであるから、その本性からいえば本覺の如來藏に他ならぬことになる（五）攝相歸性唯識。そしてその如來藏は眞如としての本性にのみとじこめるのではなく、染淨の緣に隨つて種々なる有爲法となつて顯現するものである（六）轉眞成事唯識。從つて本體である眞如の理と現象である諸法の事とは、如來藏が全く諸緣に隨うことによつて一切諸法になるものであり、しかもその自性は本來的に生滅せざるものとして不變なのであるから理事混融して無礙となる（七）理事俱融唯識とされるのである。これは五教章では「若依終教、於此賴耶識、得理事融通二分義……以許眞如隨熏和合成此本識」といわれ、終教の立場でとらえられた阿賴耶識は既に眞如の隨緣によるものであつて、その理解は全

く法相教學とは異なつた特殊な意味を持つこととなる。しかもその阿頼耶識は換言すれば一心であり、第一義真心である。即ち五教章卷第二(大正45・485a)に「如十地經云三界虛妄唯一心作、攝論等約始教義釋、爲頼耶識等也、十地論約終教釋、爲第一義真心也」というのがそれであるが、唯心を攝論等という依他性としての阿頼耶識の意味にとるのは始教であり、終教では第一義真心と解されるところのである。十地經論にいう一心が直ちに真心であるか否かは問題のあるところであるが、法藏は疑いもなく眞實心と解している。

ところで前述の一心が真心としてはっきり如來藏心に關係づけられるのは起信論義記卷中本(大正44・225c)である。

即ち「言一心者、謂一如來藏心含於二義、一約體絕相義、即眞如門也、謂非染非淨非生非滅、不動不轉平等一味、性無差別、衆生即涅槃不待滅也、凡夫彌勒同一際也、二隨緣起滅義、即生滅門也、謂隨熏轉動成於染淨、染淨雖成性恒不動、只由不動能成染淨、是故不動亦在動門」であるが、これは傳統的教學上からいう佛性としての如來藏、即ち佛の悟りの内容の衆生への轉換が、教理的にとりあげられて眞如門と生滅門により、不變と隨緣の二面から體系づけられたもののなのである。

かくて一心は如來藏であり、それは生滅に屬すると共に眞如に屬するものとなる。即ち探玄記卷第六(大正35・215b)には「一切衆生皆依眞緣起、本識之心隨名言有支我見等熏、有

六道身現、緣起虛假不礙無不壞有、是故會攝有其二門、若會緣從實即差別相盡唯一眞如、若攝末歸本即六道異形唯心而轉、約初緣起不存、是眞如門故、約後緣起不壞、是生滅門故、是故存壞無二、唯一緣起二門無礙、唯是一心故」といわれ、一心において一切諸法の成り立つさまが明確に示されるのである。そしてこの一心は修道上の觀法に關して華嚴經問答卷上(大正45・605b)に「以梨耶一心爲所依、故名爲依止一心觀、……以實等三空門爲順觀體、即以二種唯識爲順觀體、謂一梨耶唯識、即以眞識爲體、二意識唯識、即以妄識爲體也」といわれ、十地經論の一心に依つて萬法をみる觀において、順觀の體を唯識に求めた場合、それを阿梨耶識とするのは、妄識に對する眞識としての如來藏心であることを示している。

しかるに以上のごとき一心をもう一步進めて大乘別教の立場で解すると、十重唯識では、理によつて事は成り立つが、その理性は本來圓融無礙であるから、事もまた互いに鎔融して作用の上で相い礙えず、一が一切に入り、一切が一に入るものとなる(円融事相入唯識)。そして理と事の關係を體の上からみても、理には此彼の別がないように、事と事の間に異なりはなく、互いに一即一切となり(円全事相即唯識)、かくて因陀羅網が重々に影現するように一の中に一切があり、一切の中の一にまた一切があつて重重無盡となる(円帝網無礙唯識)。即ち心識・如來藏・法性の圓融により、諸々

の事相は互いに無礙となると解される。これを五教章卷第二（大正45・465b）に對比してみれば「若依圓教、即約性海圓明、法界緣起、無礙自在、一即一切一切即一、主伴圓融……是即不動本而常末、不壞末而恒本、故五義相融唯一心轉也。」となる。即ち事事無碍としての現象相互の關係も、一心においてとらえ得るとすれば唯一心の轉じたものとしてみることができるというのであり、理事無碍がそのまゝ、事事無碍なのであって、事事無碍といっても理事無碍を離れてはあり得ないということなのである。

このようにみてくると法藏における一心の特色は、我々の現實の妄念におおわれている心そのものを痛烈に批判するというよりは、そのような心の虚妄性の裏に、常に不變の眞如としての如來藏心があると考えていることにあると思われる。即ち一心を眞心と理解するのは地論宗より華嚴學派への傳統であって、淨影寺慧遠はその著大乘義章卷第三（大正44・251b）において「眞心變異爲彼妄法、眞外無別妄想法故、故經宣說、一切虚妄唯一心作、所謂唯一眞心所作」と述べ、至相大師智儼も孔目章第一（大正45・543a）において「一心即第一義清淨心」と解するのであるから、法藏の思想もこれら先人の影響によることは明らかである。そこには起信論を根本所依とし如來藏系諸經論による思想展開のあとづけがうかがわれ、心の眞實性解明への必然的轉換がみられる。唯法藏

の理解がこれら先師と異なるのは、眞如心を打ち出すことにみにつぎることなく、一切佛教を五教に判別する一大體系の中で一心の位置づけを行ない、その思想的發展の必然性を明確に示したことにあるといえるであらう。従つて本來現實の虚妄性を説明するための阿頼耶識も、始教の立場では本識の自體となつて、一切の果を生ずるものとして虚妄性が強く現われ、心としても生死の流轉面における當體と考えられながら、終教においてはそのまま如來藏となり、依他性である阿頼耶識上の虚妄分別の滅が眞實性であるといふのではなく、心がそのまま如來藏心として眞如へ通じるものとされるのである。しかもその心は更に展開することによつて圓融無碍となる。勿論現實の我々のあり方を隨緣起滅の義として、流轉生滅の相においてとらえはするが、それはあくまでも眞如の展開面であつて、その裏面にある佛の智證・如來藏は變らないのであるから、究極的には我々の煩惱の生活も如來の眞實を離れたものではないのである。即ち流轉といつても、不變の眞理がその不變性を完成せんがために生死界に應現したものにすぎないのであるから、我々の現實の多様性も唯一理性の眞心と別ではなく、そこに重重無盡として、一切の諸法を、諸法そのものの眞如への關りである理事無碍をふまへつつ、諸法相互への關りである事事無碍においてみる華嚴教學の特色があり、法藏教學の獨自な立場があるといえるであらう。